

『世間妾形氣』 卷二の一小考

野澤真樹

- 一、はじめに
- 二、前半部分の構成と人物造形
- 三、後半部分に見る当代性
- 四、お菊の長談義について
- 五、旧作利用の意味 —— むすびにかえて

上田秋成の『世間妾形氣』は、従来より先行の浮世草子の影響が濃いことが指摘されている。本稿は本作における先行作品への近似について具体的に検証するものである。卷二の一は複数の女の噂話からなる前半部分と、二人の妾の有様を対比する後半部分とに分けられ、前半部分には、噂話の担い手として西鶴の浮世草子や『色道大鏡』にも言及される「月切」の女が選ばれている。また、後半部分は同時代に出た『風俗七遊談』と重なる記述があり、作者が先行の浮世草子と同様に当代性を備えた描写を目指したことが知られる。一方、前半と後半の間にある妾肝煎・お菊の「長談義」は同時代の談義本『教訓雑長持』と方法を同じくし、この話がお菊による当世の妾への風刺を主眼とすると考えられる。右の特色を持つ卷二の一の話中に、当時実在したと思われる人物が登場する箇所が存することは注目すべきであろう。『妾形氣』においては先行作品との近似を前提としつつ、細部に織り込まれた事柄を読み取ることが課題となる。

一、はじめに

明和四年（一七六七）に刊行された和氏訳太郎（上田秋成）の『世間妾形氣』は、八文字屋本の代作者・江島其磧の『世間子息氣質』『世間娘氣質』に始まる氣質物浮世草子の一である。

時に文運東漸を迎え、旧来の浮世草子は読者を失いつつあった。末期浮世草子と呼ばれる宝曆、明和、安永年間の作品には、中国白話小説の翻案があり、江戸で人気を博した談義本の模倣と思しい作があり、目先を変えようとする書肆や作者の苦心が窺える。同じ秋成の作品で、『妾形氣』の前年に出た『諸道徳聴耳世間狙』は、一応は多田南嶺の浮世草子の影響を受けながらも、性質としては『列仙伝』をはじめとする大坂の実在人物を画く作品に連なり、上方の滑稽本類に近い。この時期の作品を概観するに、体裁はともかく、内容の面から見てこれらを一同に「浮世草子」と呼ぶことはほぼ意味を成さないと思われる。篠原進氏が「汽水域」と評したように、末期浮世草子の内容はあまりにも雑多で、近接ジャンルとの交渉が盛んであった。^②

その中で、内容、題名ともに旧来の浮世草子を模したところが明白な作の一つが『世間妾形氣』である。『世間狙』が風刺の効いたモデル小説で、多くの後印本が残ることか

ら長く愛されたと見られる一方、『妾形氣』は比較的早くその刊行が途絶えている。^③同時期には永井堂亀友による氣質物の多作があり、その中の『世間姑氣質』には刊記の「明和九年」を貼紙にて「明和十年」と改めたものがある。これは売れ残った初印本の刊年のみを改めたものと思しい。^④『妾形氣』もあるいはそれらの氣質物に埋もれ、当時の読者に好まれなかった可能性がある。

本作にもわずかながらモデル小説の性格があり、また、古典、演劇、地方伝承の利用など、旧作の模倣のみでは片付けられない特色が指摘されている。^⑤一方で中村幸彦氏が言うように、西鶴、其磧の影響が少なからず認められることも事実である。^⑥『妾形氣』が浮世草子の旧作を学んだことは、「汽水域」を形成した一部の末期浮世草子とは別の行き方であった。

本稿は、『世間妾形氣』における先行作品の摂取方法を今一度具体的に検証し、先行作品摂取の意義の一端を探るものである。そのために、構成の上で先行作品を学んだことが顕著な巻二の一「雛の酒所は山路の肝入嬢が附親」（以下「本話」）を取り上げる。

本話の梗概は次の通りである。

九月九日の重陽の節句、大坂は西堀の妾肝煎「山路のお

菊」の所に、妾奉公をする女たちが集まり、それぞれが奉公先で会った「平野町の涼風堂という扇屋の旦那」、「鞆の干鯛屋の番頭」、「長堀の石屋」の噂話をする。やがてそれがお菊の耳に入り、お菊は女たちを長々と諭す。そこへ商家の手代「久七」がやってきて、妾の身でありながら裕福な暮らしをする「おれん」の暮らしぶりを語る。皆がそれを羨むところへ、今度は湿病の夫を養うために色を売る「四五六ばかりの女房」が現れ、集まっていた面々は彼女の身の上話に哀れをもよおす。最後は「扱も夜はさまざまのある物やおかしくもかなし」と結ばれる。

本稿では便宜上本話の展開を二つに分かつこととする。複数の女による噂話による前半部分、「おれん」と「四五六ばかりの女房」とを対比する後半部分である。また、その間には妾肝煎「お菊」の長台詞がある。以後、前後半に分けて、先行作品との比較を中心に考察を進める。

二、前半部分の構成と人物造形

本話の前半では、複数の女が妾肝煎の「山路のお菊」のもとに集まり、客の噂話をする。まずは先行研究を整理しつつ、前半の構成と人物造形について考えておきたい。

早く後藤丹治氏が指摘するように、この噂話は『源氏物

語』の一場面を利用する。話の冒頭の、「こゝにしも何句ふらん女郎花人のものいひさがにくき世に」という和歌に続く「なりのぼれども、もとよりさるべきすぢならぬは心かだましく」というくだりである。これは『源氏物語』「帚木」の「雨夜の品定め」の場面で中将が語る言葉、「成り上れどもとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることもさは言へどなをことなり」に拠る⁷⁾。近衛典子氏はこれをうけて「この『雛の酒所』における『源氏物語』の利用は、単なる言葉の上だけの影響関係にとどまるものではなく、女たちが噂話をするという構図そのものが「雨夜の品定め」を反転させたものではないか」と指摘した⁸⁾。冒頭に引用される和歌「こゝにしも何句ふらん女郎花人のものいひさがにくき世に」が『湖月抄』等の源氏注釈書において「帚木」中の「人のもの言ひさがなさまよ」という一節の注として引用されていることから、ここで作者が「雨夜の品定め」の場面を念頭に置いていることに疑いの余地はない。

ただ、複数の人間が身の上話や噂話をする、といった趣向は先行の浮世草子にも見られる。早いものでは西鶴の『諸艶大鑑』巻二の五「百物語に恨が出る」(貞享元年へ一六八四)刊⁹⁾が挙げられるであろう。ここでは遊女たちが百物語に興じるが、やがて話題が客の噂へと移っていく。

次第に咄し替りて、身の上のおそろしき、人をだませし事どもを、「今思へば、千日寺にさるかたさまの、石塔を立る奉加の二分あるを、身あかりにさしつぎ、又は長門の助さまに、切もせぬ外のかもじをやりてのぼらせ、くたる事はならず、いとしや、堺山の口に、夜番をして、浦風がさぞと思ひやる。」「それよりは、肥後の久さまこそ、秤十露盤をも一代手にもたず、人さへ五十人もつかはれし身が、お内儀さまとは別れ、今は高原のほとりにましまして、竜頭をかづき、あつた大明神さまのお初尾を、申請にあるかしやると、聞もかなし。」：（『諸艶大鏡』巻二の五）

遊女たちが各々に馴染み、身代を潰していった男の話に涙しているところへ、男達の怨霊が現れるという趣向である。これは世間話から「次第に身の上の咄ししみて」、奉公先の男の噂話をはじめる本話の流れに類似する。

其積の作では、『傾城禁短気』巻二の三（宝永八年へ一七一〇刊）に同じ話形が見られる。ここでは野傾論争の中で遊女を貶める根拠として、客の文を誇り合う遊女の様子が描写される。また、同じく其積の氣質物浮世草子『浮世親仁形気』巻二の三「殺生を樂しむ嫌ひの親父」（享保五年へ一七二〇刊）には、「町内の年寄・五人組の内儀達」がそれぞれの夫の有様を語って聞かせるといふ趣向

がある。

つまり本話は「雨夜の品定め」の文章を借りながらも、実際は右のような浮世草子の類型に属する。これらの身上話が『諸艶大鏡』『傾城禁短気』においては遊女の、『浮世親仁形気』においては親父の、『妾形気』においては妾の様々な有様を、登場人物の口を通して読者に伝えているのである。

さて、この噂話の担い手となる女たちについて、文中に「月切」「一月切のかけ流し成心いき」「月君」とあることから、彼女たちが一ヶ月単位で奉公する妾であることが知られる。これについては先学の指摘があり、「本章は、宝暦頃から一般化した短期契約の妾の風習、いわゆる月がかりの女を描いたものである」（森山重雄氏『上田秋成初期浮世草子評釈』）、「宝暦の頃から見られる「月がかりの女」、又は「月がこひの女」、「宝暦・明和期に流行した「月がこいの女」（浅野三平氏『上田秋成の研究』第二章三節）などとされてきた。浅野氏が挙げた「明和視聽録」や、『大阪市史』所収の大阪町奉行所の記録などから、『妾形気』が刊行された当時にこのような月切の妾が存在したことは確かである。ただし右の指摘が、「月がかりの女」が宝暦頃に初めて出現したものであるという意味であれば、少し訂正を要する。月切の妾は西鶴の浮世草子や『色道大鏡』

(延宝六年へ一六七八)序、藤本箕山)にも見えるからである。その実態については『色道大鏡』が詳しく述べている。

月切女は、我ものと定めをかぬ妾也。この妾は大名屋
りか、又町かたの目かけにても、俄に浪人して、在付
を待つ内の業也。それと心ざし仕立置て、大家に望み
あれども、さしあたる幸いまだなき内などに、この所
作をす。ひしと其人の妾ときはめてわたしぬれば、祐さいは
きたる時引とられぬ故に、月切とさだむ。：かゝりて
の心にも、程長く定めをき、あひそめてもし心にあは
ざらん時は後悔あり。しかあれば、一ヶ月と定めて、
心にさへいれば長くきはむる事はやすしと思者、みな
月切をこのめり。

(『色道大鏡』巻第十四「月切女篇」)

ここには「我ものと定めおかぬ妾也」とあり、「月切女」
が「妾」の一種と認められていたことがわかる。また、
『色道大鏡』の後の部分には一月のうち「六斎日」に勤め
るという方法も紹介され、本話の女たちの台詞の中に「月
に六日の定め」とあるのに合致する。『好色一代男』巻二
の七に「月懸りの手かけ者」、『好色一代女』巻一の目録に
も「三十日切の手掛者」が登場し、西鶴の頃には妾奉公の
一つの形として定着していたと思しい。

なお、浅野氏は『妾形氣』の諸編が「秋成の青年時の娼
婦体験」に基づくとする。稿者も西鶴の作品や『色道大
鏡』が本話の直接の素材となつたとは思わない。秋成が実
際に体験したかどうかは別として、同時代に存在した妾の
一種が物語の登場人物に選ばれたと考えるべきである。

似たような例は『妾形氣』の他の話にも見え、巻二の三
に描かれる後家の人物造形が元禄十六年へ一七〇三に刊
行された『傾城仕送大臣』巻三の四に登場する「坊主こか
し」と呼ばれる女と一致する。このように『妾形氣』の中
では「妾」という題材に合わせ、当時実在し、先行作品に
も登場した様々な売色の中から物語の担い手を選び取つて
いる。とりわけ本話においては、月切の勤めゆえに多くの
男に会う月切の妾が、客の噂話を語るという役回りに適う
のである。

三、後半部分に見る当代性

後半部分には妾の身でありながら裕福な暮らしをする
「おれん」と、それに対し湿病の夫を養うために色を売る
「四十五六ばかりの女房」が登場する。女達は「おれん」
のことを「顔を見合せてうらやむ」一方、「女房」のあり
方に「哀れをもよほしぬ」という。この二人の妾の対比が
後半の大筋である。

この対比の方法は、作者自身が前作『世間狙』巻一の「や同じ『妾形氣』の最終話に用いており、とくに最終話は其積の『世間娘氣質』巻三の二をふまえたとも言われている。これも前半の噂話の趣向と同様に、浮世草子ではしばしば用いられる話形であった。

ここに描かれる女たちとよく似た記述が、宝暦六年（一七五六）の序を持ち、江戸で刊行された『風俗七遊談』に見出せる。『七遊談』ではそれぞれ妾、踊子、陰間、比丘尼、夜発、遊女を鼻屑にする者たちが粹でも野暮でもないという「半醉散人」のもとを訪れ、それぞれの勝っている所、相手の劣っている所を言い合い、最後に「半醉散人」が評を下す。この中に当世の妾に関する記述が見られるのである。

『七遊談』における色道談義の口切りに妾を称える「妾の譚」が見え、その中には「今の妾奉公人」の栄耀が次のように描写される。

其外名ある妾も多くあつたけれども、今の妾奉公人のしやれ有て粹なには及まい。歌を讀で思ひつかれるなんど、いふやうなたるいせんさくではなし。いかやうな大家へはじめてゆくといへども少しもうてめなく、座敷の取廻し、酒を飲み酒をも飲ませ、人の挨拶色あつてひんしやんともせず、しつこくもなく、望にまか

せ琴三味線歌浄瑠璃、めりやすおんど、聞く人うつゝをぬかし、殿様を目の塩漬にして、仕立金も望次第に、何もかもころのまゝに、上下五ツ間もある別家に男女の数を多くつかひて、四度の仕着は京染に物好をつくし、出れば釐打の乗物に對の六尺に昇れ、入れは時繪の烟草盆に銀の煙管、御伽の医者に按摩の座頭が左右につくばい、芝居見物は座敷を続にして、衣服の端手を見せ、目黒の野がけ。三囲の摘草、上野の花両国の涼に：其栄花なる事は及かたく、筆にも口にも尽しがたし。今色道の盛なるもの、是に超る者はござるまい。

（『風俗七遊談』一之巻「妾の譚」）

一方、本話後半には妾の「おれん」の暮らしぶりを奉公人の久七が語る場面があり、その描写は右の『七遊談』と重なる。

いかさま人の果報と云ものはけつかうな物。手前のおれん様のやうなうまい身ぶんと申ては、広い大坂にもたんとござりますまい。不断ちりめん羽二重を五ツ六ツづゝ引かさねてちよつとどれへござるにも手竹輿にめして黒土ふまず、芝居はいつも初日チ棧敷を西の三四軒めに極め、勸進能月見花見と、氣に入た末社衆を引つれてのお出。内にござれば琴三味せん。香茶の湯と取かへ引かへてのおなぐさみ。：

『世間妾形氣』卷二の一

記述の類似はこれだけではない。本話において「おれん」と対比される「四十五六ばかりの女房」は、「古裕の上におびさへせず。前垂の紐引しめて」というみすばらしい様子で現れ、「又こよひはお客様にやくそく致した夜なれば。小宿まで出ます」と語る。ここもまた『風俗七遊談』において妾を貶める部分に対応する。

年も廿七八に成て顔色もひねて。妾奉公のならぬ者は。肝入鼻の世話にて色事に仕成して。小宿での出合にあるき。今日を過る是を山猫といふなり。

（『風俗七遊談』三之卷「妾の譚」）

右にある「山猫」という女の描写には、「肝入鼻の世話にて」とあり、『妾形氣』において「四十五六ばかりの女房」がお菊の世話になっていることに通う。つまり本話は妾奉公の明暗両方のイメージを『七遊談』と共有するのである。

加えて、『七遊談』には当時の妾の実態を知る上で留意すべき記述がなお多い。展開上は少し遡るが、本話の前半と後半とをつなぐお菊の長台詞とも近い記述があることを指摘しておきたい。

妾は表立ぬ者なれば、衣類髪形迄も端手にすべからず。

…今は妾の道を取失て遊び者の如になりけるは此道の

腐れたる也。…妾者と遊女とは、甲乙相たかひなる者なり。彼は桜の艶なるあり。是は牡丹の嬌たるあり。其志とする所は、共に人の妻と成らんことを願ふ。…内にしては妾、外にしては遊女、此二ツは昇て奥様と仰がれ、かみさまと呼ぶる。

（『風俗七遊談』三之卷「七遊の惣譚」）

『七遊談』は七種の色売のうち、遊女と妾を甲乙付けがたいものと位置づける。ここで遊女と妾とを比較する点、妾が派手を好まざるべき点などが、本話におけるお菊の主張と一致するのである。

『七遊談』は江戸、『妾形氣』は大坂出来の作品である。本話が『七遊談』を直接利用したとは言い難く、両作品はあくまで同時代の「妾」観を共有する資料ととらえるべきであろう。

ちなみに、本話や『七遊談』が描くように、遊女と見紛うほどに派手な暮らしを送る妾の姿は、西鶴の頃のそれとは大きく異なる。例えば「妾」について『色道大鏡』には次のように記される。

彼をひめおきては、いきもはりもなく、我いふごとくになり。うわべ妻女のごとくにして、うつたうしからぬぞたのもしけれ。

（『色道大鏡』「妾篇」）

初期の浮世草子を概観すると、『西鶴置土産』卷二の三

には「上町者の手かけぐるひ」をする旦那に対し「磯ぐるひ」という言葉で色遊びの楽しみの浅いことを揶揄する場面がある。この対極には当然ながら遊女との「沖」を泳ぐような深い遊びがあり、両者への認識の隔たりが知られる。同様の認識は周縁の作ではさらに顕著である。

傾国の末世むかしより聞伝へたる強張のよそほひかけて、妾の姿とひとし。

(元禄十六年刊『傾城辻談義』巻四の三)

〔「通路」という遊女についての記述〕随分やわからかに律儀第一の生れ付。それしやの風なく、推と云字をはなれて妾者のごとくなりしが

(同年刊『傾城仕送大臣』一の四)

つまりこの時点で、妾は遊女のような「いき」「はり」もなく、どちらかといえば宿の妻に近い存在とみなされていた。

宝暦年間にはこれが大きく変わっていたことが、先に引用した『風俗七遊談』の「今は妾の道を取失て遊び者の如になりけるは此道の廃れたる也」という一節に表れている。本話にはお菊の言に「はずはな物ずきより、かへつて茶や者の第二におちて」とあり、論調は『七遊談』に類似しよう。

本話と『七遊談』の記述の一致からは、『妾形氣』がただ単に先行の浮世草子を模倣したというだけでなく、当代の妾の性質の変化までを踏まえて物語を構成したことが知られる。作者は当時の「現代小説」である気質物浮世草子の執筆に際し、題材に対する取材を怠らなかつたのである。つまり、本話は先行の浮世草子から得た構成を大枠として、当時実在した様々な妾の中から物語の担い手を選び取っている。このように時勢に合わせた描写を行うのは、西鶴、其磧以来の浮世草子作者がとった方法そのものである。本話は『妾形氣』の全十話の中でも右の意図を顕著に感じさせる。作者は先行作品の構成を学び、当代性を持つ題材を選ぶことで、典型的な気質物浮世草子の一話を構成したのである。

四、お菊の長談義について

これまでは先行の浮世草子の摂取に重点を置きつつ『妾形氣』巻二の一について論じてきた。しかし先に言及した先行作品は、同時期に行われた新興ジャンルと地続きでもある。浮世草子の典型を守る本話においても、若干ではあるが同時代作品との類似が見出せることを述べておきたい。それは前半と後半をつなぐお菊の長台詞においてである。本話では三人の女の上話を描いた後、妾肝煎の「山路

のお菊」が彼女たちに向けて持論を述べる。一部を次に引用する。

口々のそしりはしりがはしりもとへ聞へて、あるじのお菊料理ごしらへも大かたに座敷へ出て、「さきにからの咄は打とけてのうさばらしとはいひながらあまり成るかげ口。人も聞ぞかし。さる事なくてさへ、色柄にぎりて揚屋のかしかりの諸わけにはまりたる衆は、妾者はかへりて実なき仕出しと一概に定めらるる事も無理ならず。妾はもと地女にて、宿の妻にひとしく、はやり詞しらず、口舌不得手にて、生娘の心もち。ことに初目見へはいつも嫁入の夜の恥かしみ。なじみかさねては実すくなからず、一卜際しめやかならでは心のとまる物ならず。茶や者は多くの客にあふを全盛として、妾者は一人の男にまもらるるをおのがさかへとする物ぞ。…」と、長談義の最中へ：

（『世間妾形氣』巻二の一）

ここは本文中にもある通りまさに「長談義」と言うべき所で、お菊の説教はおよそ一丁分にわたる。その主張はおおむね次の通りである。

妾は多くの客をとる遊女とは異なり一人の男に仕えるもので、あまり蓮葉でないのがよい。近頃の妾は遊女くずれのようになつてしまい人の譏りを受ける。それはあくまで

月切の奉公と思うからで、一月限りのことだからといって勤めをいい加減にすべきではない。実をもつて勤めれば氣に入られ、後に宿の妻とならぬこともない。

単純に言い換えると、ここでお菊は妾奉公人のあるべき姿を語るのである。

なお、女たちの噂話に続いての「長談義」という流れは、第二章で挙げた『傾城禁短氣』巻二の三に少し似たところがある。『禁短氣』の中の客の文の誇り合いは、男色の対象である野郎と、傾城すなわち遊女との優劣を争う野傾論争の中で、遊女を賤しいものとみなす理由の一つとして語られる。この誇り合いの様子を語ったあと、語り手の「計案和尚」が次のように述べる。

此影口のむささきたなさ。男色の方に横などきらすといふ事なし。いかに其身売物なればとて、其日あふ客はかりにも一日の夫なり。それにかりにくればとて、ゆきて其ままはやわざさして、跡を当日の大臣へそなゆるといふは非道成せんさく。

（『傾城禁短氣』巻二の三）

複数の人間による噂話の後に、それに対する批判が行われるという点は本話に類似しよう。ただ、『禁短氣』では女達の噂話とその後の批判とがともに「計案和尚」の口から語られる。つまり噂話の主体である女達と、「長談義」

の主体と同じ場に居合わせない点で、本話とは性質が異なるのである。

この噂話と長談義との組み合わせを効果的に利用する話が『教訓雑長持』（宝暦二年（一七五二）、伊藤单朴）に見られる。卷之三「浅草寺に奴集り主人を評議せし事」である。ここでは浅草寺の「さる宗匠の俳諧の万句」の裏で、主人の共で来た下男達が各々の主人の悪口を言い合うのを、俳諧師の夜鳥という男が物陰で聞いている。話の冒頭で、ある僧の供でやってきた男が「車座に並び、面々主人の善悪を。評議して笑ふまいか」と提案し、各々の主人の誇りに花が咲く。その後で末座にいた「武士方の供」、「いかにも、一卜理屈こねそふな」男が次のように語り始めるのである。

さきからいやる事、一ツも道理にあたらぬ。尤、主人達の身持、おみ達がいやる通りなれば、一ツも道になふ人はいない。其旦那は先其通りだが、いかに誇り講じやとても、片落到主ばかり「わるいく」ともいはれまい。先、雪ふりの風吹のと供先の太義をいやる。きついふ了簡。此方共は。武士の食くへは、いつとも二合半かき込で、夜の内に出て、夜に入て帰るも、ふ断の事。雨にも、雪にも。旦那の御供斗でない。御使にも出て。朝から終日かけ廻る。…お手前達も。主

の馬鹿を苦にせず共。面々、心を磨ひて、人の人に成るやうにしめされ。草履取がいやしひものでもない。此方の仲間から冠着た人もむかしは出たげな。尊ひも卑ひも、只心次第で、善人悪人と、末世迄名が残る。

（『教訓雑長持』卷之三）

右に挙げたのはほんの一部で、この後話は本筋を大きく外れ分限の町人のことや盆の踊歌に到るまで内容は飛躍する。しかし「髭奴」はここで総じて主人の悪口を言い合っていた面々を諷め、当世の奉公人を批判するともにその有るべき姿を説いている。奉公人たちの噂話によつて俳諧狂いの町人の愚かさを並べ立て、後の長談義によつて奉公人の理想像を語るといふ点で、右の場面は本話と方法を同じくするであろう。

『雑長持』は『当世下手談義』に始まる狭義の談義¹³の一つである。談義本においては一話ごとに「藪医者」や「豊後節」、「競者」^{さいわいもの}など当代の厄介者が談義の槍玉に上り、滑稽を含む教訓・風刺を作品の主意とする。そのため、作中には一人の人物が長々と語る形式がとられることが多い。一方、本話におけるお菊の長談義もまた、当代の妾への批判や理想像を語る点で、同様の性格を持つてである。

こうして見ると、本話の構成は先行の浮世草子だけでな

く、同時代の文学趨勢とも結びつけることが可能である。しかし本章の冒頭に「地続き」と述べたように、談義本もまた西鶴や其磧の浮世草子の影響の下にある。どこまでが先行の浮世草子の利用で、どこからが同時代作品の模倣かという境界は、この文運東漸の時期において曖昧であった。個々の作品と本話とを結びつける決定的な証拠をこれ以上求めることは現実的ではない。よって本稿では、同時代作品の方法を本話も共有するという程度の理解に留めておく。むしろ方法の出所よりも、目的に留意すべきであろう。本話の読者は、お菊の長談義から妾のあるべき姿を説くことにこそ話の主意があると受け取ったに違いない。

五、旧作利用の意味 —— むすびにかえて

談義本との共通点があるにせよ、旧来の浮世草子と並べてみると、本話が創作方法の上で新規性に乏しいことは否めない。しかしこれまでの研究で徐々に明らかになっていくように、『妾形氣』という作品は凡庸な作を装いながらも細部の描写に多くの情報を含んでいる。その全てが読者に伝わったかどうか果たして定かではないが、『妾形氣』の執筆の段階では、その細部にこそ作意が込められていたのではないかと思われる。すると、本話が同時代の文学趨勢への接近を感じさせながらも、先行作品をよく学び、悪

く言えばありきたりな構成をとることに何らかの意味を考えたくなる。

その一つの可能性を示すのが、本話前半の女達の噂話の内容である。以下、その中に登場する客の描写を抜き出してみる。

平野町の涼風堂といふ扇屋の旦那め、きついぜいき。……此間と、さんとつれ立て御霊様へ参つたとき、平野町を心がけて透つたら、一間半口のきたなる扇屋。店のはなで銭なら五文の事を芋売と喧嘩して居をつたを……

靴の干鰯屋の番頭といふ者、新町嶋の内がよひに親方の手前に三度も不埒な品も有たとの咄し。今はきつとしまりて其家の白鼠

長堀の石屋とて六十ばかりのかた蔵、禿天窓に黒袖の衿まき、いつも白茶の木綿羽織に紋はたしか丸の内に抱袴、すみどりの紙入に文字替の銭をこはぜにつけて居る親仁。 (『世間妾形氣』巻二の一)

ここには客の名こそ出ないが、その素性や店の様子、服装に到るまでが具体的に描写されているのに気が付く。このうち「靴の干鰯屋」といえば、『浪花見聞雑話』に

載る「南金」という人物に思い当たる。

宝曆の頃、韋に南部屋金兵衛と言ほしか于魚屋有。此人、素人にて浄瑠璃を語る事、古今無双の銘人なり。：

(『浪花見聞雑話』『南金浄瑠璃』)

女の話には「干鰯屋の番頭」とあるため、「南金」についての記述と造形が完全に一致するわけではない。しかし、描写の細かさから見て、本話に登場する三人の客に右のような実在人物がモデルとして当て込まれている可能性は高いと思われる。

本話は複数の登場人物に妾の様々な有様やあるべき姿を語らせる。しかし、それはあくまで表向きの特徴であって、作者が前作『諸道聴耳世間狙』で見せた周辺人物への風刺も本話の細部に盛り込まれているのではない。そして一読すればわかるように、それぞれの人物を表す言葉は短いがかなり辛辣である。とはいえそれは前作より随分控えめで、先行作品に借りた話の構成がこの毒を覆い隠している。『妾形気』は前作『諸道聴耳世間狙』に比べ、先行作品の影響が濃いとされてきた。本稿はその定説を支持するものである。

ただし、『妾形気』の性格は先行作品の摂取のみでは説明できない。特に本話においては浮世草子の類型を襲った話の中に、当代の様々な事柄に対する風刺が織り込まれて

いる可能性が高い。作品の細部に織り込まれた要素を考えたととき、先行作品を学んだ話の構成や長談義に重点を置く方法などは、作者の意図するとせざるとに関わらず、細部を覆い隠す隠れ蓑になり得る。西鶴や其積から得た類型を認めたくえて、その細部に隠れた要素を読み取ることが今後の作品理解の上での課題となろう。

注

(1) 中村幸彦氏「宝曆明和の大阪騒壇」、「秋成に描かれた人々」(『中村幸彦著述集』第六卷(中央公論社、一九八二年)所収)

(2) 篠原進氏「浮世草子の汽水域」(『浮世草子研究』創刊準備号、二〇〇四年十一月)。なお、当時の浮世草子の状況は中村幸彦氏「安永天明期小説界に於ける西鶴復興」(『中村幸彦著述集』第五卷、中央公論社、一九八二年)にも詳しい。

(3) 長島弘明氏「諸道聴耳世間狙」『世間妾形気』書誌(『実践女子大学文学部紀要』二十三号、一九八一年三月)、及び同氏「上田秋成全集」第七卷(中央公論社、一九九〇年)所収『世間妾形気』解題。長島氏は『妾形気』の刊行が早く途絶えた理由について、「火災その他による板木の早い時期の消滅・散佚という外的な要因」を推定している。

(4) 『頼原文庫選集』第二卷所収『当世銀持気質』解題(臨川書店、二〇一七年、稿者担当)

(5) 『妾形気』の細部については以下の研究が備わる。【古典】浅野三平氏「上田秋成の研究」(桜楓社、一九八五年)第二章四「世間妾形気」をめぐって―「諸国廻船便」・歌枕染風

- 呂敷」に及ぶ、近衛典子氏『世間妾形氣』と古典―巻一―「人心没てしられぬ臙夜の酒宴」を中心に」（『上田秋成新考―くせ者の文学』（ベリかん社、二〇一六年）、【演劇】日野龍夫氏「秋成と時代物浄瑠璃」、『文学』第五十巻十号、一九八二年十月）、神楽岡幼子氏『諸道聴耳世間狙』の挿絵（関西大学『国文学』七十号、一九九三年十二月）、同氏『諸道聴耳世間狙』と歌舞伎（『演劇研究会会報』二十五号、一九九九年六月）、【地方伝承】堤邦彦氏「諸道聴耳世間猿の構造―世間と伝承」（『国語と国文学』第五十七巻三号、一九八〇年三月）、堤邦彦氏『世間妾形氣』の地方説話をめぐって―巻一の二・一の三私註（『文学・語学』九十四号、一九八二年七月）、長島弘明氏「秋成浮世草子と浦島伝承」（『秋成研究』（東京大学出版会、二〇〇〇年）所収）など。
- (6) 中村幸彦氏「秋成に描かれた人々」（『中村幸彦著述集』第六巻、中央公論社、一九八二年）に「西鶴又は其磯からの影響は益益濃―いとの指摘がある。
- (7) 後藤丹治氏「雨月物語に及ぼせる源氏物語の影響」（『日本文学研究資料叢書』『秋成』、有精堂出版、一九七二年）
- (8) 近衛典子氏前掲論文（注5）
- (9) このことは前拙稿『世間妾形氣』の方法―二の三、若後家の寺参りはてつきり仕立物やの宿替』の場合」（『国語論文』第八十三巻十号、二〇一四年十月）第三章にて言及した。
- (10) 森山重雄氏「上田秋成初期浮世草子評釈」（『国書刊行会、一九七七年）、浅野三平氏「上田秋成の研究」（前掲注5）第二章三「世間妾形氣」考」三「二之巻の一の月がかりの女」
- (11) 前掲拙稿（注9）。加えて「好色訓蒙図彙」（貞享三年）巻二にも「坊主ころし」に関する記述を見出した。なお、前稿

（注9）を発表した際には、『妾形氣』巻二の三について「傾城仕送大臣」の直接利用は見いだせないしながらも、それに類した先行作品から人物造型の素材を得たという立場をとった。その後、人物造型について必ずしも先行作品を介する必要はないという考えに到り、本稿もこの見解に基づくことを断っておく。

- (12) 森山重雄氏「上田秋成初期浮世草子評釈」（『国書刊行会、一九七七年）は『世間娘気質』巻三の三を「妾形氣」最終話の「題材」と認定する。

- (13) ここでは中野三敏氏「談義本―その精神と場」（『戯作研究』、中央公論社、一九八一年）の定義に従った。

〔引用文献〕

- 『世間妾形氣』（『上田秋成全集』第七巻、中央公論社、一九九〇年）／『好色一代男』、『諸艶大鑑』、『好色一代女』（『新編西鶴全集』第一巻本文篇、勉誠出版、二〇〇〇年）／『傾城禁短氣』（『八文字屋本全集』第二巻、汲古書院、一九九三年）／『浮世親仁形氣』（『八文字屋本全集』第七巻、汲古書院、一九九四年）／『色道大鑑』（『新版色道大鏡』、八木書店、二〇〇六年）／『風俗七遊談』（『洒落本大成』第二巻、中央公論社、一九七八年）／『西鶴置土産』（『新編西鶴全集』第四巻本文篇、勉誠出版、二〇〇四年）／『傾城辻談義』（『傾城辻談議』付、遊色控柱・好色入子枕、古典文庫、一九九九年）／『傾城仕送大臣』（『玉箒木付、傾城仕送大臣』、古典文庫、二〇〇二年）／『教訓雜長持』（『談義本集一』、古典文庫、一九九四年）／『浪花見聞雜話』（『隨筆百花苑』第七巻、中央公論社、一九八〇年）

※引用に際し、句読点を改めるとともに、文中の片仮名を平仮名に統一した。また、発話部分に「」を付した箇所がある。

付記 本稿の一部は二〇一三年二月二十六日に同志社女子大学に

て行われた京都近世小説研究会二月例会における口頭発表に基づきます。論文化に時間を要してしまいました。発表に際し御教示を賜った皆様に厚く御礼申し上げます。